今日の「一日一言」- 致知出版社の書籍情報 | 致知BOOK WEB - Microsoft Internet Explorer
ファイル(F) 編集(E) 表示(V) お気に入り(A) ツール(T) ヘルプ(H)
戻る 検索 お気に入り
アドレス(D) http://www.chichi-book.com/daily/index.html
ここから日本語で検索(JWord) 移動 リンク

RSS配信中:

今日の一日一言

致知出版社の大好評『一日一言』シリーズから、毎日の心の栄養となる、今日の「一日一言」をお届けします。

利益を還元する　2009年07月22日(水曜日)

益(えき)は、上を損して下を益す。民説(よろこ)ぶこと疆(かぎ)りなし。
(風雷益(ふうらいえき))

風雷益(ふうらいえき)の卦(か)は山沢損(さんたくそん)の卦(か)と「損益(そんえき)」で一対になり、経済の基本ともいうべき循環の法則を学ぶことができる。
山沢損の卦は、民が質素倹約して国益をもたらす。これに対して風雷益の卦は、国が民を助けて富ませようとする。民は喜び、その結果、国も民も限りなく利益を生ずる。
「能(よ)く損すれば即ち益す」という言葉があるが、利益を還元しない国家、会社組織はいずれ倒れることになる。

損して得をとる　2009年07月21日(火曜日)

損(そん)は、下(しも)を損(そん)して上(かみ)に益(ま)し、その道上行(じょうこう)す。
(山沢損(さんたくそん))

山沢損(さんたくそん)の「損」は損する、減らすこと。
何のために損をするのかといえば、「その道に上行する」自らのステップアップのためである。この損は自分の先行きに投資することと考えればよい。
資格を取得するために学費を払って勉強する。あるいは、出資が多くても良い仕事をして取引先に利益をもたらし、いずれ相応の利益を得るように努力する。
いずれも上昇のための「損」である。

道を知らず　2009年07月20日(月曜日)

仁者(じんじゃ)はこれを見てこれを仁(じん)と謂(い)い、知者(ちしゃ)はこれを見てこれを知(ち)と謂(い)い、百姓(ひゃくせい)は日に用いて知らず。故(ゆえ)に君子の道は鮮(すくな)し。
(繫辞上伝(けいじじょうでん))

「これ」とは一陰一陽(いちいんいちよう)の道。一陰一陽の成す道は中庸(ちゅうよう)である。仁者はそれを仁愛(じんあい)の道といい、知者は智慧(ちえ)の道という。
優れた識者でも、とかく自分の視点の一端に偏(かたよ)ってしまう。また一般大衆は日常、無意識に陰陽の理(ことわり)を用いて生きているが、それが何かを知らない。それ故(ゆえ)、道全体を明瞭に把握して用いる者は少ないのである。

リーダーと組織　2009年07月19日(日曜日)

陽卦(ようか)は陰(いん)多く、陰卦(いんか)は陽(よう)多し。
(繫辞下伝けいじかでん)

優れた能力や技術を持つ一人のリーダー(陽)には、その力に輔(たす)け従う人々(陰)が集まる。また、人を育てる包容力のあるリーダー(陰)には、優れた能力の人々(陽)が集まる。
すべての組織、集団の中では少数の者が中心勢力となって、多数の者を指導することで組織が成り立ち、バランスが保たれる。
しかし、指導者が多くなる時は争いが起こる。

耳目聡明(じもくそうめい)　2009年07月18日(土曜日)

巽(そん)にして耳目聡明(じもくそうめい)なり。
(火風鼎(かふうてい))

火風鼎(かふうてい)の「鼎(かなえ)」は、天への供物を煮炊(にた)きする大鍋である。重要な祭器であり、古代中国では国威を表す象徴であった。そこから統治者の実力や国家権威を競うことを「鼎(かなえ)の軽重(けいちょう)を問う」というようになった。
鼎は王が賢人に饗(きょう)する際にも用いられた。
賢人が多く集まれば鼎は重く大きくなる。
「巽(そん)」は従順、謙虚。リーダーが謙虚に賢人の意見に耳を傾け、「耳目聡明(じもくそうめい)」であれば、国の権威は保たれ、鼎の軽重を問われることはない。

疾風迅雷(しっぷうじんらい)　2009年07月17日(金曜日)

風雷(ふうらい)は益(えき)なり。君子もって善を見ればすなわち遷(うつ)り、過(あやま)ちあればすなわち改(あらた)む。
(風雷益(ふうらいえき))

激しく吹く風と轟(とどろ)く雷。これに倣(なら)って、人の善い所を見たら風のように速やかに移り学び、自分に過失があったなら、雷のように決行して改めよ、と教えている。
それは自分だけの益に止まらず、他人にも益をもたらすことになる。

苦しみを楽しむ　2009年07月16日(木曜日)

険の時用(じよう)大いなる哉(かな)。
(坎為水(かんいすい))

坎為水(かんいすい)の「坎」「水」は険難・苦難を表す。壮絶な険難が度重なる時である。
険難という時は用い難いが、あえて用いて学ぶことを「時用」という。これは人生において絶大な効用があると教えている。
孔子は『論語』の中で「知者は水を楽しむ」と説いている。「苦しみを楽しむ」など非常なる苦しみの渦中にあっては考えられないが、逃げずに乗り越えた後に振り返れば、あの苦難は大いなる時であったとさえ思える、と易経はいうのである。

まぐまぐ殿堂入り
人間力・仕事力が確実にアップする
致知出版社 Officialメルマガ
登録

書籍検索
- カテゴリーインデックス
- 著者名インデックス
- 書籍名インデックス

検索

今月の月刊『致知』
8月号特集
「感奮興起」

特集「感奮興起」◎対談◎師弟感奮興起物語『世界の王』はこうしてつくられた荒川博(日本ティーボール協会副会長)&王貞治(福岡ソフトバンクホークス球団会長)
詳細はこちら

SPECIAL WEB SITE
chichi-yasuoka.com
安岡正篤先生に関するウェブサイトです

RSS配信中:

今日の一日一言

致知出版社の大好評『一日一言』シリーズから、毎日の心の栄養となる、今日の「一日一言」をお届けします。

洞察力を養う　2009年07月31日(金曜日)

洞察(どうさつ)とは物事の裏にある本質を見抜くこと。また、外側に現れない人の心、内面の動きを読むことも洞察である。

洞察力を説く風地観(ふうちかん)の卦(か)には、洞察に至る段階が次のように記されている。
第一「童観(どうかん)す」――幼い子供の目。何が起きているかという現象だけを観
みる。
第二「窺(うかが)い観る」――人の見解を聞いて物事を窺い知る。広く世間を知らず、小さな視野で物事を観る。
第三「我が生(せい)を観る」――主観的に観る。自分を省みて、出処進退の行動を判断するが、まだ客観視には至らない。
第四「国の光を観る」――物事を客観視できる段階。国民のささいな表情やしぐさから、その国のリーダーのあり方、国全体の情勢を察する。表面にとらわれず物事の質を観る段階である。
第五「民を観て我が生を観る」――起こっている物事を写し鏡のように観、物事全体を正しく導くために何をすべきかを知る。
要するに、現象だけを観る、人の話から物事を窺い観る、自己中心的に物事を観る段階では洞察には及ばない。深い洞察のためにはまず、全体を広く客観視する大局観を養わなくてはならないのである。

時の三要素　2009年07月30日(木曜日)

易経の表す「時」とは、時間だけでなく空間をもいう。

・時(時間)
・処(場、環境、状況)
・位(立場、社会的地位)

この三位一体の時を表している。
いいかえれば、時は「天」であり、処は「地」であり、位は「人」にあたる。
したがって、物事の対処にあたっては、今という時、環境、立場にあって、どうするべきかを考えなくてはならない。

麗沢(りたく)　2009年07月29日(水曜日)

麗沢(りたく)は兌(だ)なり。君子もって朋友(ほうゆう)講習す。
(兌為沢(だいたく))

兌為沢(だいたく)の卦(か)は沢が二つ重なった象(しょう)を持つ。
「麗」は付く、並ぶ。二つの沢が地下水脈で通じて互いの沢を潤(うるお)し、枯れることがない。同じように、君子は心の通じる友である「朋友(ほうゆう)」とともに切磋琢磨して、「講」知らなかったことを学んで知り、「習」すでに知っていることを繰り返して、身に付けていく。
学校関係の団体や塾に「麗澤(れいたく)」という名が多いのはこの言葉に由来している。

直(ちょく)・方(ほう)・大(だい)　2009年07月28日(火曜日)

直方大(ちょくほうだい)なり。習(なら)わずして利(よ)ろしからざるなし。
(坤為地(こんいち))

「直(ちょく)」は、素直、実直、真っ直ぐに進む。「方(ほう)」は正方形の意で、方正。また東西南北、四方八方に広がる様子。「大(だい)」は遍(あまね)く盛大に。直方大は天に従い、万物を受容して遍く育成する「地」の徳である。
教えられたことを私情や理屈で曲げずに、素直に受け入れて実践できる人は、知恵の一滴を与えられただけでも、習わずとも広大に伸びていく、といっている。

戦いの勝ち方　2009年07月27日(月曜日)

万邦(ばんぽう)を懐(なつ)くるなり。
(地水師(ちすいし))

戦争の勝ち方を説いている言葉。戦争をする際は、戦った国々を味方にしていくような勝ち方をするべきである。勝って相手を殺すのでは、戦後の繁栄はありえない。
これは現代社会でも通用する。経済競争でも相手を潰すのではなく、相手を生かす勝ち方を考えなくてはならない。
そのためには勝ち取った利益を還元し、人々の賛同を得る努力をすることである。
利益を独り占めしようとすれば、それ以上の成長は望めない。

碩果(せきか)食われず　2009年07月26日(日曜日)

碩果(せきか)食われず。
(山地剥(さんちはく))

「碩果(せきか)」とは、大きく実った果実のこと。
山地剥(さんちはく)の卦(か)は小人がはびこり、君子が追い落とされるような非道(ひどう)な時代を表すが、そんな混乱した中にあっても、大いなる果実は食い尽くされずに残っている。一度地に落ちるが、それによって芽が生じ、また発展するのである。
この果実は傑物や富財などと考えてもいい。そうした大きな原動力が残ってさえいれば、乱れた後の世の中は泰平(たいへい)の時代になっていくことを示している。

まぐまぐ殿堂入り
人間力・仕事力が確実にアップする
致知出版社 Officialメルマガ
登録

書籍検索
- カテゴリーインデックス
- 著者名インデックス
- 書籍名インデックス

検索

今月の月刊『致知』
8月号特集
「感奮興起」

特集「感奮興起」◎対談◎師弟感奮興起
物語「世界の王」はこうしてつくられた 荒川博(日本ティーボール協会副会長)&王貞治(福岡ソフトバンクホークス球団会長)
詳細はこちら

SPECIAL WEB SITE

chichi-yasuoka.com
安岡正篤先生に関するウェブサイトです

昇一塾
渡部昇一ファン倶楽部

Copyright(C)2006-2009 株式会社 致知出版社
〒107-0062?東京都港区南青山6丁目1番23号
TEL:03-3409-5632 FAX:03-3409-5294
E-Mail:chichi-book@chichi.co.jp